革命者！

Lime

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
革命者！

【Ｎコード】
Ｎ５１１８Ｅ

【作者名】
Ｌｉｍｅ

【あらすじ】
革命とは一人の人間による決起・・・蓮はそんな人間の一人だった。ある日、彼は始まりの日を迎えた。その日から彼の革命への道は始まった。

プロローグ～始まりの日～（前書き）

小説初投稿のＬｉｍｅです。
まだまだビギナーですが、小説を読んでもらえたら光栄です。出来れば最後まで終わらせたいですがもしかしたら途中でギブアップするかもしれませんｗ
ヨロシクお願いします＞＜

プロローグ～始まりの日～

蓮「ハァハァハァ・・・。チッ！まだ追って来てるか！」
青年は逃げていた。
蓮「何で俺がこんな目に・・・。」
青年の名は　菊川　蓮。
高校２年生。体系はスラリとした長身で痩せており、かといって筋肉質でもなく程よく筋肉がついている体だ。
髪は赤茶で目の上の辺りに髪の先があるぐらいの長さ、今は目の色は日本人なのでもちろん黒。
典型的な主人公キャラである。
？「ゴメン！私のせいでこんな・・・。」
蓮「君のせいじゃないって。悪いのはアイツらだ。」
？「そうですか・・・？じゃあ、私を逃がして！」
蓮「・・・なんか訳ありみたいだし・・・。俺の家まで走るぞ！」
？「はい！」
そういって二人は蓮の家まで逃げる事にした。

？「チィ。見失ったか・・・。」
？「この町は《浄化》されやすい・・・。もうそろそろ引くぞ・・・！」
？「了解。」
追っ手の二人組は町の闇へと消えていった・・・。

～１０分後～
蓮＆？「はぁ、はぁ、はぁ」
二人は家まで逃げてきた。
辺りはもう薄暗かった。民家の屋根から夕日の残光が降り注ぎ、二人を不気味に染めていた。

蓮「もう追ってきてない・・・か？」
？「・・・うん、諦めたんだと思う。」
蓮と同じくらいの年のその女の子は安心したようにいった。
蓮「とりあえず俺の部屋で休む？」
？「じゃあ、お言葉に甘えて。」
蓮「案内するよ。」
？「菊川君の家って凄いんだね。どこかの大富豪みたい！」
蓮「みたいじゃなくて大富豪なんだ・・・。ハァ～、俺は嫌なんだけどさ。」
？「何で？」
二人は正門から家の玄関まで１００ｍはあるであろう庭をまっすぐ歩いていた。
蓮「ん？金持ちってなんか特別扱いされるっていうか・・・。嫌味にしか聞こえないと思うけど。」
？「確かに・・・。」
蓮「えぇっと、まだ君の名前まだ聞いてなかったな。」
蓮は笑いながらいった。
？「え？あぁ、そういえばそうだったね。私の名前は　菊川君と同じだよ。」
蓮「えぇ？！ホントに？」
恋「ホントだよ？漢字で「恋」って書いてレンって読むの。」
蓮「偶然ってあるもんだね。っと、指紋認証指紋認証。
恋「やっぱり富豪さんだね。うらやましいな～。」
蓮「んなことないって。ほら開いた。」
扉はピッ！っと音を出し自働で開けた。
恋「わあああぁぁぁ！スゴイ！」
扉が開くとそこには床が大理石、壁には北欧のアンティーク、天井には煌びやかなシャンデリアが煌々と光を放っていた。
蓮「見とれてないで、さっさと部屋行こうよ。」
恋「え？あ、うん。」

二人は階段を昇って二階へ上がり長い廊下を歩き出した。
蓮「・・・こんな豪華に着飾ってるけど、ウチは本当は最低な事をやってるんだ・・・。」
恋「え？どういうこと？」
蓮は顔を伏せながら無言で部屋に案内した。
蓮「ここ。」
蓮は一つの扉を指していった。
そして、蓮はドアノブに鍵を挿して開錠した。
扉が開いた。
蓮「あんまりモノとか置いてないけど、我慢してね。」
恋「全然構わないよ！私が勝手に連れてきてもらったんだから。あ、そうだ、菊川君の親さんに挨拶しないと。」
蓮「構わないよ！親は俺になんの興味もないからきっと挨拶しても無駄だと思う。」
恋「え？・・・分かった。」
二人はしばらく無言で俯いていた。
蓮は自分の顔を鏡でみた。
蓮「えぇ？！なんだこれ！」
恋「何？どうしたの？」
恋は蓮に心配そうにいった。
蓮「ちょっと見てくれ！」
恋「どこ見れば？」
蓮「左目」
恋「左目・・・？・・・え？！」
恋は信じられないとでも言いたいような声を出した。
蓮「俺の左目に何かの紋章が浮き出てる・・・。」

第二話～動き出す時～（前書き）

試験やら何やらで忙しいので更新は毎日は無理かもしれませんが頑張っていきたいです。見た人は出来れば感想頂けたら嬉しい限りです。

第二話～動き出す時～

蓮は驚きを隠せなかったが、何故か冷静に物事を考えることが出来ていた。
蓮「（いつからこんな事になっていた？よく思い出すんだ・・・蓮。）」
恋「菊川君・・・？」
蓮は恋の心配を他所に思考を張り巡らしていた。
蓮「（恋に会った時・・・あの時俺は・・・。）」
頭の中でほんの３０分前に起こった事がフラッシュバックしていた。

～３０分～
恋「誰か！助けてください！」
恋は二人の男から逃げていた。
蓮「あ～、今日も平凡な一日だったな。」
俺は・・・ここまでは普通だったはずだ。もし変化があらわれていたなら分かっていたはず、実際今のこの「目」の状態だと全ての事象を冷静に分析できる気がする。
だからあの時まではなってなかったはず。
そして直後・・・そう、あの後に恋と出会った。
恋「そこの人！助けてください！」
蓮「え？！どうしたんですか？！」
？「待て！お前が必要なんだ！」
？「女だからといって容赦はしない！」
人ごみから大声でこっちに向かってくる二人組が遠く見えた。
蓮「あいつらに追われてるのか？」
恋「はい！だから助けて！」

蓮「あの時・・・。」
恋「え？どうしたの？」
蓮はようやく一つの答えにたどり着いた。
蓮「恋が俺と一緒に逃げようとしたとき・・・俺は自分が通ったことのない道を
近道だと分かっていた。だから、あの時から俺はこの「目」になっていたんだ。
恋「どういうことかわからないけど・・・。便利だね。」
蓮「便利だ、いや、もしかするとこの「目」は使えるかもしれないな・・・。」
その時、恋は目の前にいる青年から恐怖を感じた。
恋「（この人って一体・・・。）」
蓮「そうだ・・・。アレを実行するか・・・。」
そういうと蓮は突然携帯を取り出し誰かと連絡をつけはじめた。
蓮「・・・俺だ。突然ですまないがアレを実行することにする。」
？「予想より早かったですね。何か機会でも？」
蓮「機会か・・・、絶好の機会だな。それだったら。」
？「よく分かりませんが話は後で聞きましょうか。ひとまず軍隊を揃えておきます。」
蓮「助かる。お前にはいつも感謝している。」
？「私は蓮様の部下ですので・・・。では後ほど。」
そういうと男は電話を切った。蓮は恋に話しかけた。
蓮「事情が変わったよ、恋。すぐに家に帰ってくれるかい？」
蓮はそっけなく恋に言った。
恋はしばらく考えた後、とんでもない事を言い始めた。
恋「私も蓮についてく！ダメ？」
蓮「な？！ついていくだと？」
蓮は本当に驚いていた。ほんの３０分前ぐらいにあった女と一緒に
今まで練ってきた作戦を行うなど考えもしなかったからである。
蓮「これからは危ないことがたくさんある。それでもいいのか？」

恋は少し黙っていたが、やはり意志は揺るがなかった。
恋「それでもいい。さっきは嘘ついてた、実は私・・・名前がないの。」
蓮はもう驚かなかった。
蓮「そんな気がしてたよ。苗字を言わないで名前だけ名乗るなんて。どうせ、家もないんだろ？」
恋「ばれてたんだ。その目、凄いね♪」
蓮「馬鹿、もともと俺はＩＱ高いんだよ。」
恋「え？そうなの？」
蓮「まぁ・・・気にするな。」
恋「ふぅ～ん。」

二人は暫く見つめあったまま黙った。
そして、その空気に耐えられず二人とも笑った。
蓮＆恋「フッ、アハハハ」
二人は部屋を出た。

第三話～変動する情勢～（前書き）

ふぅ・・・今のところ三話までは毎日更新できてるｗ
頑張るぞー！ｗｗ

第三話～変動する情勢～

二人が部屋を出て二階から階段を下りようとした時、一階から二人組の会話が聞こえてきた。
蓮は二階から静かに一階を見た、知らない男が二人何かの話をしているようだった。
？1「・・・《覚醒》はまだ起こっていないはずだ。」
？2「しかし・・・あの時、恋と一緒に逃げていた男、確かに目が《天使の祝福》を受けていた。」
？1「本当か？！だが・・・《覚醒》するにはまだ条件がいる・・・。天使の祝福は第一段階に過ぎん・・・！」
？2「どちらにしろ、俺ら二人であいつらを染めればそれで終わる・・・。」
？1？2「クックックッ・・・！」
蓮は話を一字一句漏らさず聞いていた。
蓮「ここも既に危ないのか・・・。仕方ない・・・。」
恋「どうするの？」
蓮「裏から出るしかないな・・・。恋、こっちに静かに着いてきて。」
恋「うん。」
二人は一階の男たちに注意しつつ、自分の部屋に戻っていった。

蓮「ここが隠し通路につながってるんだ。」
恋「凄いね。これだったらばれないよ。」
蓮「ばれたら意味ないからね。じゃあ、恋は後についてきて。」
恋「中・・・結構ジメジメしてるし、なんだか暗くて怖いよ・・・？」
蓮「待って、今懐中電灯つけるから。」
蓮は持ってきた懐中電灯のスイッチをＯＮにした。

そこは長い長い通路だった。どんどん下へ続いているのが分かる。
そこはまだ見えない。
恋「・・・ねぇ、これってどこに繋がってるの？」
蓮「ついてからのお楽しみってやつかな？」
恋「・・・菊川君のイジワル。」
蓮「まぁ、とりあえずここよりはマシだと思うから安心して。」
恋「ここは嫌・・・。」
二人はしばらく無言のまま底の見えぬ階段を下っていった。

その頃、一階の二人組はある人物から連絡を受けていた。
謎の男「情勢が変わった。菊川　宗次郎が我々《エグゼクティブ社》に反旗を翻した。」
？１「は？！あ！いえ、それは本当ですか？！」
謎の男「俺の部下の情報だ・・・。まず間違いないだろうな。」
？１「てことは、もうあの娘には用はないですね。」
謎の男「あぁ、しかし・・・情報が漏洩したら問題だ。始末はできるようにしておけ。分かるな？」
？１「はい。」
謎の男「よし・・・。俺はしばらく忙しくなる。お前たちは単独でしばらく娘を尾行しておけ。」
？１「了解いたしました。では。」
男は電話を切った。
？１「ゼノ。お前は周辺の町で聞き込みをしてこい。あの男・・・気になるやつだ。」
ゼノ「了解した。・・・バリス、気をつけてな。」
バリス「？俺がやられるとでも？」
ゼノ「いや・・・なんとなく嫌な予感がするんだ。」
バリス「気にするな、すぐに染めてやるよ。あんなムシケラども。」
ゼノ「だといいんだが。」
二人は館から出た。

ある施設にて・・・。
謎の男「これで日本・・・いや、世界はしばらく暗黒の時代に突入するだろう。しかし・・・」
男は持っていたダーツを投げた。見事、真ん中を射た。
謎の男「最後に世界を牛耳るのは俺だ・・・。」

第四話～ラボ到着～（前書き）

とうとうサボってしまった・・・。ごめんなさい＞＜
ダメですね、この頃勉強が忙しくて続けられるかマジで心配だ。
どんどん登場人物が増えますが自分でも混乱しそうｗこういうのはメモって置くと便利ですね。小説書いてると頭が良くなるかもｗ
感想書いていただけると嬉しいです。小言等なんでも結構です。いただければ幸せですので。

第四話～ラボ到着～

永遠に続いていると感じるほど長い階段も１０分ほど歩き続けていると底の方にかすかに光が漏れていた。
蓮「お、恋。もうそろそろここから出れるぞ。」
恋「ホント！？私もうダメかと思ってた。」
蓮「ダメではないと思うぞ。ほら、ついた。」
蓮が鉄製の分厚いドアの凹凸のある部分に手をかざした。するとドアは自働で横に収まっていった。
？「あれ？蓮様ぁ～？・・・蓮さまぁー！」
突然少女が蓮の名前を連呼しながら飛びついてきた。
？「寂しかったよぉ～！今まで何してたのぉ～？」
蓮「ゴメンよ、琴。なかなか機会がなくてな。ここには来れなかったんだ。」
琴「蓮様がいなくて琴・・・ずっと寂しかったんですからぁ～。」
蓮「あ、ゴメン恋。紹介するよ、この子は　銀山（かなやま）　琴。ここの《ラボ》の研究チームの一員なんだ。」
恋「えぇ？！こんな小さな子が？！」
琴「小さくても頭は良いもん！」
蓮「恋、この子は俺よりもＩＱが高いんだ。」
恋「蓮君より高い？！」
琴「えっへん♪」
恋「信じられない・・・」
蓮「琴。龍二のところまで案内してくれ。」
琴「龍二室長ならまだアメリカから帰ってきてませんよぉ。」
蓮「アメリカ？・・・そうか、とうとうアレが完成したか。」
恋「アレって・・・？」
蓮「ん？それは最重要機密だからいくら恋でも言えないよ。」
琴「部外者は立！入！厳！禁！」

蓮「琴。恋は部外者じゃないんだよ。俺の秘書なんだから。」
琴&恋「えぇ！？」
蓮「恋は驚く必要ないだろ？だから、琴。生意気な口の利き方は控えなさい。」
琴「・・・はぁ～い、蓮様ぁ。」
蓮「良い子だ。恋？奥に案内するよ。」
恋「え？あ、うん。」
三人は研究ラボに入っていった。

少しこの世界について説明しなければならないことがある。
この世界は私たちのいるこの現実とはかけ離れている事を理解していただきたい。
何が起こるかわからない。次の瞬間にはこの世界では起こりえないことが実際に蓮たちに襲い掛かってくることもある。
私たちの常識では考えられない、計れない。それがこの世界の常識・・・。
しかし、それさえも蓮たちは乗り越えていけるだろう・・・。
革命とはとてつもなく苦しい選択なのだから・・・。
その苦しみが蓮たちを守ってくれる・・・強くしてくれる・・・。
そして・・・。

第5話～研究の成果～（前書き）

久しぶりの更新になっていまった・・・。スンマセン＞＜これから
もちょくちょく書いていきたいです。

第5話～研究の成果～

三人はラボの中を歩いていた。
中はとても明るく人も多かった。外からはただの球状の建物だが
一度中に入ってしまえばまるで別の空間へ飛ばされたかのような錯覚を覚えるほどである。
琴「でも、蓮様？なぜ今になってラボに戻ってきたのですかぁ～？」
琴は不思議そうな顔をしていった。
蓮「少し緊急を要するんでな・・・。この良い機会、逃していいはずが無い。」
蓮は意味深げに呟いた。
恋「蓮・・・？大丈夫？」
恋は心配そうに蓮に言った。
蓮「大丈夫だ、逆に喜びで発狂しそうなくらいだよ。いや、至って冷静なんだがな。」
琴「あまり蓮様を見くびらないほうが身のためだよ。これでも東大に主席で入ってるんだから。」
恋「これでもって・・・。私はそのくらいだと思ってたけど。」
二人は睨み合いながら研究室まで急いだ。肝心の蓮は考え事をしていて全く気付いていないのだが。

研究室に着いたとき、研究チーム全員が蓮の到着に歓喜していた。
？「蓮ぼっちゃま、久しく存じます。」
蓮「ぼっちゃまというのは・・・恥ずかしいから止めてくれ、爺。」
爺「すみません、癖でして。」
蓮「で、例の部隊の用意は。」
爺「もう出来ております。それに蓮様に新しい武器を。」
蓮「？！これは・・・！」
蓮は爺から筒状の武器を貰った。

爺「特殊セラミックス製により軽量化を成功させ、特殊コーティングにより同じ”ロッド”による攻撃にも耐えられるようになりました。
そして、このロッドの一番の特徴・・・高速振動させたロッドに電熱処理を加えることによって偶然発見されました・・・。
空間を斬れます。」
蓮「空間だと・・・？」
爺「正確にはこのロッドを敵に向かって斬りつけるだけで空気の刃が飛んでいく・・・。まるで銃弾のように。」
蓮「恐ろしい兵器だな・・・。コイツを転用すれば世界の情勢は大きく変わるぞ・・・。」
爺「蓮様専用の武器ですので・・・。」
蓮「全く・・・良い仕事をしてくれるな。爺は。」
爺「蓮様に満足していただくのが私たちの喜びでありますから。」
琴「私が発見したんだからね！」
蓮「琴が・・・。ありがとうな。」
琴「うん・・・。蓮様の為だもん・・・。」
蓮「よし！全軍に伝えろ！これよりテロリズム　ミーティングを開くと！」
蓮は全てが順調に思われた。しかし、一つのミスを犯していた。
バリス「こいつは驚いた・・・。まさかあの子供がこんなことをしていたとは・・・！」
バリスはラボをあとにした。

第6話～明かされる事実～（前書き）

ホントに久しぶりに書いた。ようやく面白くなってきたかな。これからもヨロシクね。

第6話～明かされる事実～

蓮たちは会議室に集まっていた。
外では作戦会議を行う旨を知らせるアナウンスが流れ続けていた。
アナウンス「――――議室で作戦会議が行われます。幹部の方々は今すぐ会議室にお越しください。繰り返します。会議――――」
蓮「しかし、久しぶりだな・・・。」
蓮は目を瞑ったまま呟いた。
恋「そんなに久しぶりなんだね。顔見たら分かる。」
爺「蓮様は宗次郎様に長年幽閉されていたのです。恋様には分からない事情かも知れませんが・・・。」
蓮「爺・・・！恋には話すな・・・！」
爺「失礼いたしました。」
爺は固く口を閉ざしたまま喋らなくなった。
暫くの間沈黙が流れたが恋が突然喋り始めた。
恋「私ね、信じられないかもしれないけど。ある研究施設で両親に研究材料にされていたの・・・。」
蓮「ん？それはどうゆう・・・」
恋「簡単に言えば両親の研究の為のモルモット・・・。愛情なんて少しも受けなかった・・・。」
蓮「・・・」
恋のいきなりの告白に蓮は言葉を失った。
恋「その施設はね。”人間の進化”はまだ続いているのかを研究する為に造られた所なの。」
恋は淡々と喋り続けた。
恋「その研究はあまりにも危険で実験台にされる人間は適合者でなければ研究する意味さえなかった。
両親は適合者を探していた。けど、送られてくる人間はすべて適合者では無かった。

常人では適合者は生まれない。だから・・・、両親は禁忌を犯した・・・！」
そこで恋は言葉を詰まらせた。
蓮「蓮・・・？」
恋「禁忌・・・そう、人間を人工的に作る。つまり、適合者を・・・クローンを作ったの・・・！」
琴「それって国際条約で禁止されてる事じゃ・・！」
蓮「あぁ・・・！最も忌むべき事だ。そして、人間の傲慢が表れている具体例の一つだと言っていい・・・！」
会議室にはいつの間にか幹部全員が集まっていた。しかし、誰もが恋の話に耳を傾けていた。
恋「蓮君のいうとおり、クローンを作った時点で研究員達は両親を厳しく罰したわ。
両親達は軟禁状態になり、クローンを作った事は世間に表ざたになることは無かった。けど・・・」
恋「一つの悲劇が起こってしまったの。」
蓮「悲劇？」
恋「――5年前、あの事件を覚えてる？」
蓮「・・・！”惨殺事件”の事か？！」
恋「あれは”私”がやったの・・・。」
蓮「いきなり何を言い出すんだ？冗談だろ？」
恋「私の目を見て・・・。」
すると恋の右眼に蓮の左眼に浮かび上がっていた紋章が表れた。
会議室にいる全員が呆気にとられていた。
蓮「なんで恋に・・・！」
恋「蓮・・・。実は私が”始祖”なの。その”天使の祝福”は私があなたに分け与えた”覚醒する為の力”。」
蓮「”始祖”？”天使の祝福”？”覚醒”？どういう意味だ？」
その時ラボの入り口から悲鳴が聞こえてきた。
？「ここか！我々”エグゼクティブ社”に抵抗するレジスタンス共

の本拠地は！！」
アナウンス「厳戒警報発令！厳戒警報発令！ラボにいる者は今すぐ地下シェルターに避難してください！繰り返します！厳戒———」
蓮「どういうことだ！何故奴らにここが分かった？！」
バリス「不思議そうな顔だな？少年！」
バリスは蓮に向かってロッドを構えていた。
蓮「お前は・・・！あの時の！」
バリス「驚いたよ、まさか宗次郎の一人息子がこんな事をしてるなんてな。」
バリスは蓮に向かって斬りかかった。
バリス「親子そろって恐ろしい限りだ！！」
蓮は新型ロッドで受け止めた。
蓮「クッ！親父と一緒にするな！！」
蓮の眼に紋章が浮かび上がった。

第7話～蓮の初陣～（前書き）

非常に多忙で更新がかなり遅れてしまいました；；

第7話～蓮の初陣～

蓮の眼に表れた紋章は目の前にいるバリスを睨みつけた。
バリス「おーおー、怖い怖い！あの女に”天使の祝福”を与えられるとは。運が良いのか悪いのか・・・。」
蓮「さっきから”天使の祝福”だの”覚醒”だの一体なんなんだ！」
バリス「お前は”適合”したんだよ！」
蓮「適合？！それは・・・まさか！」
バリス「そのまさかだよ・・・。」
蓮はさっきの話を思い出していた。
人間の進化・・・それを証明するためには常人では適合者にすらなれない・・・。
しかし、俺は人から生まれた子だ。何故”適合”出来た？！
蓮「恋！さっきの話は本当か？！」
蓮はバリスと迫り合いながら必死で叫んだ。
恋「本当だよ！嘘なんてつかないよ！私もなんで蓮が”適合”できたのか不思議だった！」
蓮「じゃあ原因は不明？！そんな理不尽な事あるはずが・・・！」
バリス「何も悲観することはないさ！お前は”力”・・・いや”人間の進化”を体感できるんだからな！」
バリスは一旦後ろへ下がると何かを呟き始めた。
バリス「母なる大地の力を私に・・・”マグニチュード”！」
バリスは何かを”詠唱”し終わると、片手を地面につけた。
蓮「？・・・うわっ！なんだ？！」
突然震度7はあるであろう大地震が起こり始めた。
バリス「アッハッハッハ！貴様！”詠唱魔法”を知らんのか！」
蓮「”詠唱魔法”？！魔法なんてこの世界にあるはずがないだろ！」
バリス「それが出来るんだよ！これを使えばな！」
バリスは首から掛けているペンダントを指差した。

蓮「そのペンダントがどうした？まさかそんなものをつけてるだけで魔法が使えるようになるなんて無いよな？」
バリス「正解！♪そのとおり！まぁ機密事項だからこれ以上は言えないが。」
蓮「卑怯だ！そんな人知を超えたモノを扱うなど！」
バリス「勝てばいいのさ！結果だよ！この世の中は”結果”さえ良ければその過程は全て省いて考えるのさ！」
蓮「クソ！分かったようなことをいう！」
バリス「実際説得力あるだろ？坊や！」
蓮「恋！爺！幹部の皆！ひとまずこのラボを放棄する！全員、地下飛行艇停留所へ急げ！」
バリス「おっと！そうはさせるか！」
バリスはまた”詠唱”を始めようとした。
バリス「母なる大地っ？！クゥッ！貴様！」
蓮は空間をバリスに斬り飛ばした。
蓮「一刀流奥義・烈空斬。何てね。」
バリス「餓鬼が！！」
二人は再び斬りかかりにいった。

爺「皆の者。蓮様は多忙のようだ！私たちは迷惑が掛からぬように停留所へ向かうぞ。」
琴「お爺ちゃん。私怖い。」
琴は地震が苦手のようで爺にブルブル震えながら抱きついていた。
爺「琴も一人前の研究員なのだぞ？しっかりしなさい。」
爺は厳しく、しかし決して怒鳴らず琴を勇めた。
琴「・・・ウン。蓮様の為だもんね。」
恋「停留所はどこから行けば？」
爺「私についてきなさい。そこにここのラボの研究員全員が搭乗できるだけの大飛行艇”マリア”が格納されておる。」
恋「マリア・・・。良い名前。」

爺「よし！皆の者。私に付いてきなさい。」
爺達は停留所へ向かった。

第八話～血の神の神官～

恋たちは地下のマリアへ急いでいた。
爺は迅速に地下へのエレベーターへ向かった。
しかし・・・
爺「なんと・・・！」
恋「どうしたんですか？！」
爺「エレベーターが使えぬ・・・。階段から地下へ行くしかないとは・・・。」
恋「さっきの地震でエレベーターが緊急停止してしまったみたいですね。」
爺「仕方ない。皆の者、少し遅れるが階段を使って地下へ行くぞ。」
琴「私、運動苦手ぇ・・・（汗）」
恋「蓮の為・・・でしょ？」
琴「うぅ～～～。分かってるけどぉ～～。」
恋「ほら！行くよ！」
恋は琴の手を無理やり引っ張って階段を下りていった。
爺「若いの～・・・。年寄りにはキツイわい・・・。」
研究員Ａ「何言ってるんですか。爺様も行くんですよ！」
爺「分かっておる。・・・全く、年寄りを何だと思っておるんじゃ・・・。」
皆、いきなりの敵の襲撃に心身共に疲れていた。
しかしその頃、蓮とバリスはそれ以上に辛い戦いを繰り広げていた。

蓮「ハァハァハァ」
かれこれ３０分、二人は戦い続けていた。
両者共に服は散々に破れ、髪は乱れ、体力もだいぶ消耗してしまった。
バリス「俺の魔法にここまで耐えた人間、見たことないぜ。」

蓮「褒めてるのか？それは・・・。」
バリス「褒めてるのさ！けどな、もう終わりにさせてもらうぜ！」
バリスは両手を胸の辺りで合わせ何かを唱え始めた。
バリス「地の神の名の下に我に仇名す敵を滅せよ！グラン・ド・グリム！！」
そう叫びバリスが両手を地面につけた瞬間、バリスの地面の周りを囲むように魔法陣が現れた。
魔方陣は強烈な光を発しながら空中へと浮かび、そこからファンタジーの世界から出てきたような”エルフ”が出現した。
そのエルフは目を閉じたまま空中に浮かんでいる。
バリス「冥土の土産に良いものを見せてやるよ！！グラン！目の前にいる小僧を殺れ！！」
バリスがそういった瞬間、そのグランと呼ばれたエルフは蓮に突っ込んでいった。
蓮「なんだコイツ！うわぁ！！」
蓮はエルフにロッドを振り下ろした。しかし、その攻撃はエルフが手から出した岩の盾のようなもので防がれ
同時にその盾でタックルをされ連は後方へ吹っ飛ばされた。
バリス「驚いたか？コイツは”土の神の神官”でな。いわゆるエルフってやつさ！」
蓮「エルフ？！さっきから何なんだ！そんな話、信じられるか！」
蓮はそういって再びグランに特攻した。だが
蓮「ぐはっ！クソっ・・・！」
グランに斬りかかった。一太刀浴びせようと・・・、しかし、一太刀浴びせるどころか
蓮の攻撃は見事にかわされ、その隙を突いてエルフにダイアモンドの剣で体を突き刺された。
体からはドバドバと血が流れてゆく・・・。
バリス「・・・お前は強い。あと二年・・・いや、一年あれば俺に勝てたかもしれない。

けど、お前は俺に会っちまった・・・。運が無かったな。その出血だと体が動かせないだろう。」
蓮「・・・ハァハァハァ、・・・俺は死ぬのか・・・？」
バリス「・・・死ぬ。この状況を見れば分かるだろう・・・。いや、血が出すぎて頭じゃ考えられんか・・・。」
敵が最後のトドメを刺しに来る音が聞こえる・・・。
いやだ・・・。俺はこんな所で死にたくない・・・。死ねない・・・。
俺はあの日誓ったんだ・・・、「この国は変わらなければならない。いや、変えなければならない！」と・・・。
だから、こんなところで倒れてる場合じゃねぇ・・・。
蓮は最後の力を振り絞り、今まさにトドメを刺そうとしている敵と対峙した。
蓮「・・・俺は頭はいい。けど・・・、こういう力仕事は苦手だ。」
バリス「そうか・・・。だが、そんな心配ももうしなくて良い。今、楽にしてやる。」
バリスはロッドを振り下ろした。
終わりか・・・、俺はここで死ぬのか。蓮の頭に走馬灯のように浮かぶ母の顔・・・。
母さん・・・。俺、母さんとの約束・・・果たせそうにないや・・・。
蓮は目から涙を零した・・・。
蓮の体を光が包んでいた・・・。

第八話～血の神の神官～（後書き）

更新遅れすぎ・・・（汗）
入試が近いので執筆が遅れてしまいますが
温かい目で見ていただければ幸いです。

第9話～騎士、目覚める～

――ここは・・・

？「蓮・・・、ようやく”目覚めた”のね。」

蓮「この声は・・・、母さん？」

蓮は真っ白な空間に漂っていた。見渡す限りの白の世界が蓮を包んでいた。

――そこに母がいた――

母「あなたが目覚めたということは・・・あの子に会ったということね？」

蓮「あの子って？」

母「”始祖”よ・・・。人間を創造した神の子。」

蓮「・・・もしや、恋の事？」

母「あなたがそう思うなら・・・。あなたはその子から”天使の祝福”を受けたようね。」

蓮「母さん、それってこの眼の紋章と何か関係があるのか？」

母「そうよ・・・、だけど私は言えない。それはあなたの眼が答えを導いてくれるはずだから。」

蓮「それってどういう・・・」

母「今は意味が分からないはずね。だけど・・・あなたが”第二の始祖”になれた時、その意味が分かるはずよ。」

そういった瞬間、母は白の空間に溶け込み始めた。

蓮「・・・！母さん！逝かないで！！」

母「そんな顔をしないで、蓮・・・。私はようやく自由になれるの・・・。現世から昇華されるのよ・・・。」

蓮「ダメだ・・・！そんな事・・・言っちゃ・・・。」

母「お父さんはどうしてるかしら・・・。あの人、私がいなきゃ何も出来なかったから・・・。」

蓮「・・・父さんはしっかりやってるよ。母さんの分まで。どんな

こともね・・・・。」
母「そう・・・・。それは良かったわ・・・・。これで私は安心して逝けるわ・・・・。」
蓮「俺は・・・・！俺はどうしたらいいの？！母さん！」
母「蓮・・・・。私は信じているわ・・・・。あなたが”世界を救う”事を・・・・。」
蓮「母さん・・・・。」
その時、左眼から流れていた涙が突然止まった。
まるでその瞬間から悲しみさえ罪であるかのように、涙を流す資格を失ったかのように・・・・。

その傭兵は目の前の光景を信じることが出来なかった。
バリス「・・・・こりゃ驚いた。あの少年が”マリア”の子だったとは・・・・！」
傭兵の目の前には”光り輝く十字架（シャイン・クロス）”が浮かんでいた。
その中心には蓮の姿があった。蓮は目を覚ました。
蓮「・・・・なんだ？体から痛みが引いてる・・・・。それに、この紋章は――――？」
蓮の体にはそこら中に左眼の紋章のような模様が浮かび上がっていた。
バリス「それはな、マリアの御加護を貰った”血の神の神官”の証明さ。」
蓮「血の神の神官？なんだそれは？」
バリス「俺も詳しくは知らないが・・・・、お前がS級並に危険な事だけは分かった！今すぐ始末してやる！」
そういうとバリスはまた呪文を詠唱し始めた。
バリス「地の神よ・・・・。我に力を与えよ！グラン・グラビティ！」
バリスの体が様々な鉱石によって鎧のようにコーティングされている。
まるで光り輝く人間のオブジェのように・・・・。

バリス「・・・ふぅ。この状態、結構持続するの難しいんだよねぇ・・・。まぁ一気に片付けるから問題はないがな！」
そういうとバリスは蓮の方へ素早く飛んでいった。
蓮「・・・一つ言っとく。」
バリス「なんだ？死ぬ前の一言ぐらいだったら聞いてやるぜ？！」
蓮「そうじゃない。死ぬのは・・・お前だ！」
そういうと蓮の周りを漂っていたシャイン・クロスが凄まじい光を放出し始めた。
バリス「うわぁ！なんだこの光は！浄化されちまう！」
バリスは思わず退避行動を取ってしまった。
蓮「その動き・・・読んでたよ！」
バリス「しまっ・・・！」
蓮はバリスに向かって神速の如きスピードで迫った。
バリス「後ろを・・・取られただと？！」
蓮「・・・終わりだ！」
蓮は知りもしなかった呪文を何故か詠唱し始めた。
蓮「（あれ？なんで俺はこの呪文を知ってる・・・？！）」
しかし今はそんな事はどうでもいい。今は目の前にいる敵を倒すだけだ！
蓮「我は大いなるマリアのしもべ、血の神の神官。願わくば、我に仇名す敵を滅ぼす力を与え給え。」
バリス「その詠唱魔法は・・・”始祖魔法（インペリアルマジック）”！何故お前がそれを・・・！」
蓮「聞いてどうする？お前は今、この瞬間俺に浄化されるというのに・・・」
蓮はそういうと手を胸の辺りで合わせた。
蓮の体が白と黒の光でコーティングされていく。まるで、白銀の騎士のように・・・。
そこには一人の白銀の剣士が立っていた・・・。

振り下ろされた剣は見事にその傭兵の胸を突き刺していた。
蓮「俺は・・・ようやく理解した。」
バリス「へぇ・・・。理解した、かい？ほんとにかい・・・。そうか・・・。俺が・・・、ようやく。」
そういった瞬間、目の前の傭兵は砂の塊と化した。
一陣の風が吹き、その砂の塊は天井にぽっかりと空いた大穴へと吸い込まれるように散っていった。
剣士は倒れた。

第9話～騎士、目覚める～（後書き）

ようやく・・・話が出来上がってきた？って感じですかね？自分でも分かってないんですが・・・。
早めに更新できてよかったぁ・・・w

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5118e/

革命者！

2010年12月18日03時20分発行